大正十二年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十四年三月十三日印刷納本　大正十四年三月十五日發行

婦人と勞働

三月號



職業婦人社發行

第三卷第二號

十四年三月號

婦人と勞働



三月八日は婦人解放デー

花瓶の水も氷るこの寒空に、あはれや、夜の八時四十分すぎ巣鴨町妙義神社の境内に生後百日位の女兒が捨てゝあつたと新聞紙は傳へてゐます。生後百日と云へば、もう、無心な笑顔でにこ〳〵してゐる可愛さかりです。捨てた親の身になつても、捨てられた兒の身になつても、胸が潰れる思ひがするではありませんか。

親から、親の喜びを奪ひ、子から、子の幸を奪ふものは誰か。おいそれと、だれが自分の子を捨て得ませうぞ。私たち婦人が婦人解放、否全無産階級の解放のために、たとへ半分、四半分の力でも一つに纏めてつくしたいと希願してゐるのも、實に、かくの如き不幸をこの世から絶滅させなければならぬからであります。

×　　×

三月八日は私たちの記念すべき婦人解放デー、一九一七年三月八日、ロシヤの無產階級の婦人がその專制政治、資本主義に反抗して大示威運動を起したその日を導火線として、ついに今日の勞農ロシヤの共和國が生れ出て、而して、婦人と子供の完全なる權利が確保された日なのであります。

此記念すべき日を迎へるにあたつて、私たちの當然背おはればならぬ社會共同責任の前に、一層勇敢でありたいと思ひます

無産婦人の實際生活と婦人職業

布施辰治

一

私は、平生、私共が同じ如うに働き、同じ如うに活きて行くと云ふ事實から觀た「業」に對して「職」とか「營」とか「醜」とかの特種意義を附して、彼れ是れの論議を試みるに忍びない程に、慘めな無産婦人の實際生活を氣の毒に思ふて居る者であります。

けれども、私共の人生觀と社會觀とを徹底した適材適所主義から觀た無産婦人の實際生活を見渡しますと、單に同じ如うに喰ふて、同じ如うに活きて行くと云ふ事實のみから云へば「業」は即ち「業」であつても、夫れ自らに「職」と「營」と「醜」との區別があると云ふ警告を發しない譯には參りません。

其處で、從來「業」と云ふ事がどう解釋せられて居たかと云ふ事を考察して見ますと、業は渡世の爲めのナリハヒであつて、生活する爲めの家業又は職業だと解釋して居りますし世間一般も又、單に喰ふ爲めの手段方法と云ふ事より以上の意味を、徹底した「業」の解釋を進めては居られない如うに考へます。

が、しかしながら、それは喰はなければ活きて居られないと同時に、活きて居なければ

人間で無いと云ふ如實の人間生活を維持して行く、個々の人間生活を押し詰められたものから觀た「業」の意義であつて、一般的に廣く高く強く人間が人間として活きて行くと云ふ積極的の人生から觀た、ほんとうの「業」の意義を含んで居る解釋では無いと考へます。萬一にも「業」と云ふ意義の解釋を、さうした消極的人生觀に止めて、單に喰ふて活きると云ふ事のみに限るものだと云ふ事にしたら、喰ふ爲めの泥棒も亦立派な「業」だと云へるでせう。

實際、先年東京市で實施した、東京市在住者の業体調査の業別中に「財産賣喰業」と云ふのがありましたが、全て喰ふ爲めの手段方法が「業」だと云ふ事になりますと、所謂財産賣喰業も又立派な業だと云ふ事に爲るのでありませう。

二

けれども、如何に業と云ふ意味の解釋を卑近低俗に引き下げても、所謂財産賣喰ひが「業」であるとか、泥棒が「業」であるとか、賭博が「業」であると云ふ譯には行かないと信じます。

斯うした考察から觀た「業」は、矢張り喰ふて活きる手段方法と云ふ事丈けでは無い樣に思ふ。早い話が、こゝに一例を取りて其の解釋を試みるとして、敎職を奉じて居る婦人は立派な職業婦人であります、勞働に從事して居る婦人は、固より立派な職業婦人であるに相違ありません、が、琵琶をヤル婦人はどうでせうと云ふ事に爲ると、稍々問題に爲りま

す。が、矢張り、其の人が特に琵琶の適材を以て、一般の社會生活に必要な適所の貢献を果して居るとすれば、之れを職業婦人と解するに何んの差支へもありません、けれども、更らに一歩を進めて、藝者が職業婦人ですかと云ふ事に爲ると、問題が大變面倒に爲ります、けれども、所謂藝者を一種の社交機關として、交際上手な適材を有するものが、交際場裡の適所に在りて、或は客を慰安し、或は客と客との用を辨ずると云ふ事でしたら、夫れも立派な職業婦人と云はれぬ事は無いでせう、が、然し、現在の藝者なるものが、決して個性の適材を發揮してゐると云ふことでは無くて、普遍的な婦人の適材を發揮して、異性の要求を充たすと云ふ如うな事から、職業婦人といふ名稱は許し難い事に爲ると考へます。

三

況んや、更らに一般のレベルを下げて、娼妓や賣淫婦人を職業婦人と呼び得るかと云へば、誰れしも之れに同意するものは有りますまい、然かも、事實は娼妓にせよ、賣淫婦にせよ、夫れに依りてパンを求め、其のパンを喰ふて居るのでありますが、單に夫れに依つて飯を喰つて居ると云ふ丈けでは、迚ても職業婦人といふ名稱は許し難い事になる事が判かるでせう。

斯の如うに論じて來ると、所謂「業」と云ふものを從來の解釋通り喰ふ爲めの手段方法な

りと云ふならば、其の「業」と云ふもの丶中に、多少の種類別けをする必要が起ると思ひます。そして夫れこそは即ち「職」か「營」か「醜」かの區別と種類とを生じて來るのであります。

無產階級としては有產階級の搾取に虐げらるる上に、女性としては男性からの賤視と輕蔑とに苛まるゝ無產婦人が、自力で生活して居る事さへ容易ならざる實際生活に就て、私が斯ふした業体の區別や種類やを論議考察するのは誠に忍びない事ではあるが、總ての人が單に喰ふて生きて居る事が「業」だと考へて居る中は、到底職業婦人の地位が向上しないと考へるからであります。

之れ私が、こゝに所見の一端を述べて、同じ無產婦人が同じ如うに働いて、同じ如うに喰ふて生きて居ても、其の業が果して「醜」か「營」か「職」かと云ふ事に十分の考察を徹底して、總ての無產婦人が眞の職業婦人たらん事を祈求する所以であります。

婦人と時事

婦人同志倶樂部と政治研究會婦人部

實業同志會々長武藤山治氏夫人千世子氏は、政治に興味をもつ婦人の社交機關として婦人同志倶樂部を設立された。多分實業同志會系の商工資本家側の夫人や令孃を中心にした政治的色彩を多分にもつた團体が、こゝから成立つのであらうとは、誰でもすぐ考へられるところであります。

ところがこゝに政治研究會婦人部が、今度新たに設立されました。

政治研究會は、全無産階級の解放を目的とした政治的な集りで、いづれ近い内に無産政黨の出現を見るにちがいないのですこれに附屬する婦人部が、無産階級の婦人を中心にして、特に貧しい婦人の利益を擁護するためにつとめることはいふまでありません。資本家婦人と、無産婦人とが、偶然にも相對抗して政治的な集團を作つたといふことは興味あることであります。

こゝで考へられることは、目下婦人參政權運動の獲得を目的として組織された期成同盟會のことですが、これは、今では慢然と婦人といふ名に於て結盟してゐるだけで。會員の中には、無産婦人もあるし、資本家側の婦人もあります。(直接、その婦人自身資本家である人は、少ないが)然し、女といふ名の下に金持も、貧乏人も、一緒に拒まれてゐる政治上の權利――即ち參政權を求めるために、全ての婦人が一致してゐるのは當然でせう。只、ゆく／＼は婦人の政治的自覺に從つて、その運動が前に述べたやうに、立場／＼に依つていくつにも分れゆく事はうたがひのない事であります。



職業婦人の經濟的地位

山川菊榮

六

婦人の職業生活が普及するに隨ひ、種々の問題が起つて參りますが、先づ職業婦人自身自已の地位に關する正しい理解をもつことの必要な事は前にも申した通りです。頭腦勞働に從ふ職業婦人が自分を筋肉勞働者より特に高尙な、別種の人種であるかの如く考へることと共に、婦人自ら自已の職業生活の意義を無視し、又は輕視する傾向も亦その無自覺を證明する一つの事實であります。

世間一般の職業婦人を見る目に二通りあります

其一は『婦人は男子と異なつた使命をもち、男子と異つた能力を與へられて居る』といふことを論據として、婦人が家庭外の勞務に携はることを特に不幸な、又は不道德な事のようにさへ云ふのであります。けれども家庭の內部に於けると同樣、社會に於ても、男女間には或自然的な分業の限界の保たれてゆくことは必然であつて、謂ゆる『男子と異なる婦人の使命や能力』が、何故家庭內に於てのみ保存し發揮されねばならぬか、其等の女性の特徴を、廣く一般の社會生活の上にも發揮す

ることが何故に歡迎さるべきでないか、については一向得心の行くような説明が與へられて居りません。

のみならず、男女分業の原則がどうあらうとも働かねば食へないのが全ての無產者に共通の現實でありますから、男も女も餓死を免れるために、少しでも收入のある職業に就かうとするのは當然の勢であります。そこで根本的に見て、男女に依て就職の動機に相違はなく、ただ女子の場合には新なる權利の要求を含む點に於てのみ違つてゐるので、もし男子の職業生活を咎むべき何等の理由もないとしたら、女子の職業生活に對しても同じ原理が適用されなければならないのであります。

婦人の賃銀が特に廉いとか、勞働條件が劣惡であるとかいふことが、いかに重大な結果を伴ふにしても、猶且つ婦人が收益を伴ふ業務に從事することが、大多數の婦人にとつて、家長の横暴や、悲慘なる結婚や、極度の貧困や、汚辱の生活からの解放乃至救濟を意味する唯一の道であることは否まれません。そして婦人の職業生活を一概に不幸なもの、又は不道德なものゝように云ふことの不合理なのは勿論でありますが、さまでに云はずとも、婦人の職業的活動を一時的な、偶然的なものと見て、畢竟するに婦人は常に家庭といふ避難所――安全地帶を持つてゐる者で、職業的地位の高下の如きは、さほど重要な問題でないと見るのは、極めて一般的な態度であるらしく思はれます。

日本の現狀に於いては、各種の業務を通じて、賃銀勞働に從事する女子の中では未婚者が過半數を占めてゐること、且つ勤續年限も二三年乃至十年以下に終る者が大部分であることは事實であります。又日本よりは遙かに成年の職業婦人の多い

外國に於てさへも、其職業的活動は、幼兒をもつ間は中絶せられることが多いのであります。けれども個々の婦人の個人的問題としてでなく、これを全體として見る時、婦人の職業的活動は國民經濟の上の益々重大な、恒久的な要素となり、既婚未婚を通じて職業婦人の數量は增大する一方であります。隨つて勞働者としての婦人の利害は、一般無産階級の利害と密接に結びつき、更に其勞働狀態の如何は、國民全體の後繼者の運命と直接相關聯するので、個人々々の立場から見ても、社會全體の利害から見ても、職業婦人の地位の高下は益々重大な意義をもつようになつたのであります

七

婦人の生活は時代と共に變化しました。無産階級の婦人にとつては、もはや家庭は、此世の嵐からの避難所でもなければ、社會の經濟的動搖から獨立した、特殊の別天地——特殊の安全地帶でもないことが明白となりました。機械が手道具に代り、自動車が駕籠に代り、學校が寺小屋に取つて代つたような變化が、一時的、偶然的なものではなくて、永久的なものであると等しく、其等の物質的變化と相伴うて起つた廣般な社會的變化の一部分である婦人の生活の變化とても、決して一時的なものではなくて、將來永く續く大變化の一段階に過ぎないのであります。

年寄に明治初年の頃の話を聞きますと、其頃の水戸人は、しきりに時世の變遷を罵り、田舍者の跋扈を慨嘆して、再び『公方樣の天下』に戻る日の遠くないことを信じて、さう語り合ふことを以て互に慰めてゐたものだそうです。

封建的な經濟組織の下に於ては、その經濟組織に照應した社會制度が唯一の正しい社會制度であ

ると信ぜられてゐましたが、此信念を新しい次の時代まで持越して、新しい社會に照應した新しい思想、新しい生活樣式にすることの出來ない者はいつまでも過去の特定時代に於てのみ正しかつた特定の思想や生活樣式を以て、永久に正しい唯一の思想、唯一の生活樣式のように考へがちであります。

婦人の生活の變化について見ても同じことで、婦人が家庭の內部で勞働し、夫や親に對しては從屬的な關係にのみおかれてゐたのは、封建時代に於ける婦人の唯一の正しい生活樣式でありましたが、資本主義の經濟組織は、さういふ家族制度の形體を根本から動搖させ、男女關係を全く新しい基礎の上におき始めたのであります。資本主義の時代には、婦人が職業に從事することは其產業を維持する上に必要にして重要な手段であり、各個々の婦人から見ても、職業は自分や家族の生活を維持し、人間としての尊嚴を賣らずに濟む唯一の手段でありますから、今後益々發展の勢にあることは論を俟ちません。

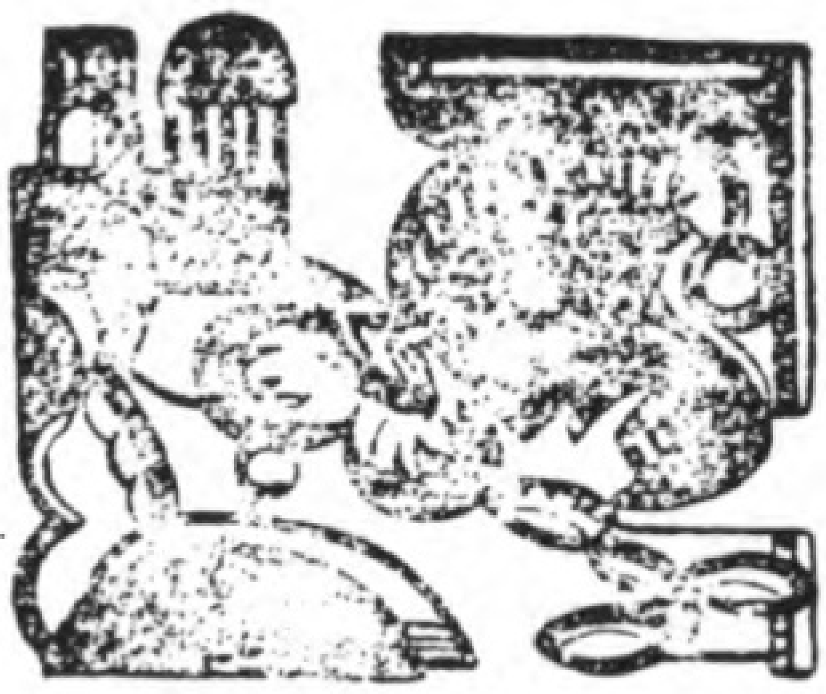
婦人の生活に於ける此の變化を例外的、偶然的な現象と見て、一般的には、婦人は自己の生活に對して何等の責任なく、經濟的にも思想的にも獨立性を持たず、親や夫の從屬者として生きるのが永久に正しい、唯一の合理的な生活樣式であると考へることは、根本的に觀方を誤まつて居り、此誤まつた觀察の上に立てられた、職業に對する態度は甚だ危險千萬なものであります。即ちさういふ態度は、職業生活に對する婦人の眞劍さを傷つけ、職業的地位の向上に關するその冷淡無關心を助長し、隨つて勞働狀態の劣惡を來して、婦人自身の苦痛や墮落の原因を作ると共に、其等の事實

事にのみ婦人の興味を限定しようとして居りますけれども、封建時代が二度と來ないやうに、其時代に於てのみ可能であつたところの、家庭のみを天地とする婦人の生活も二度と來る氣遣ひはありません。吾れ〳〵は、婦人の職業的活動が永久性を帶びてゐることを認め、職業生活に對する無關心、無責任な態度を一擲して、職業婦人の地位向上のために眞劍に戰ふ覺悟を持たなければならないのであります。（つゞく）

がひいて男子の職業的地位にまで影響し、更に一般無産階級の生活を破壞されることゝもなるのであります。

婦人は賢母たり、良妻たることを以て本分とせよとか、家庭は婦人の唯一の領土であり、樂園であるといふような主張が、單なる抽象論としては既に力を失ひ始めたことは事實であります。けれども實際の問題に當つては、斯ような思想的傾向によつて知らず識らずの間に養はれた心的習慣が猶ほ强く根を張つてゐるので、婦人の中に、その職業生活の社會的意義を十分に理解し、それを尊重する氣分の欠けてゐることは事實であります。

『公方樣の天下』の追慕者が封建制度の破壞を一時的な現象だと考へたやうに、今の世の保守的思想家も又、婦人の職業生活を一時的な現象と看做し、之に重きをおく事を拒んで、專ら家庭内の仕



母であり、職業婦人でもある彼女

土屋ならえ

それが女なるが故に、母であり妻であり嫁であるが故に、どんなに女性が多くの疲勞と屈従の生活にあるかを考へた時に、私はたまらなく苦しいさびしさに消え入りたい心持になる。私は或一人の女性に接してしばしば泣いてゐる。彼女は家計を保つために、勇しく職業婦人として立つてゐる。しかし三人の子供の爲にもまたなく良き母である事を願つてゐる。終日外にあつて他の多くの男子達と共にまじめに働いて、人としての職業の前に何の遜色もないまでに立派に、その務をはたして家に歸へる、温かいお茶にその疲勞を休めやうとするひまもなく、右と左に最愛の子供達が彼女を取り卷いてしまふ、しかも彼女は、子供の前に裕かな微笑を示して疲れの色は少しも見えない、それは、まあ何んといふ尊とい母子の愛であらう、何といふ美しい母だけが持つ感情の發露であらう、しかしそれにも疲れはなほある、其時夫は、姑舅は、やすませ樣とする一言も出さないばかりか、それは當然な責任であるとして見過してゐる、そこには彼女が終日外での務を終つてきた事は忘れられて、只母としての務だけ、尤もらしく要求される。しかし彼女は、それでもよいと喜んで愛する子供なるが故に、まめ〳〵しくお遊の相手にもなり、少しの時間も惜しいものの樣に繕物などにかゝる、

あゝ、尊とい使命が母であるといふ事を、心から感謝することの出來るものは如何なる階級にある母がそれであらうか。

仕事につかれ子供の世話に疲れてゐる彼女は、さらに夫への心づかひが、少しでもゆるやかにされた時に、どんなにはしたなくせめられる事であらう、子供への世話をあれこれとしながらその頭には夫の身邊のいろいろ、さては食事のあれこれ、嫁としての姑への心づかひ、主婦としての萬端を、一時にはたさねばならない、それ許りであらうか、今、彼女は留守中、職業にたづさはつてゐる間中、子供らの世話を姑にかけてゐたといふ事が、あだかも彼女一人の責任であるかの樣に姑への遠慮を忘れる事が出來ない、そして御厄介をかけてすまなかつた事と禮儀をつくさねば機嫌がわるい、子供が少しでも老人たちに、いたづら半分の氣にいらない言葉でもつかつた時には、それはみな母なる彼女の躾のよろしくない罪に歸して了ふ。彼女はそこでまた、あやまらねばならない、いつも子供に就いての責任だけは彼女一人が持たねばならぬ、母として、妻嫁として如何に澤山の務が彼女の前に積れてゐるか、とても〳〵擧げつくされないその多くの使命、それは餘りにも彼女に過重であることは當然すぎる程當然だ、それでも彼女の周圍は、彼女の重荷を氣にとめないで平氣にあつかつてゐる。彼女は每日々々、さうした身体の疲勞と心勞とを、何時何處で癒すことが出來るか、彼女は疲勞に疲勞をかさねてもなほ表面に滿足と微笑の生活をつゞけてゐる。

私はこゝまで考へた時にあたりもかまはず泣けてくる、かういふ女性が大部分であるのでは

ないかしら。それでゐて世間はなほ女については何かせめる事がないかと考へてゐる。私は全ての女性の爲めに、私もその一人であるそれらの女性の爲に戰ひたい、彼女を、もつといたはらねばならない、爲すべき務だけ澤山要求して、與へるべき慰安と休息の何もを彼女に考へやうとしない、何といふ大きい矛盾がそこにはある事だらう。世の中に、どんなに、種々の問題が未解決のまゝ殘されてあつても、それよりも何よりも、この過重に、しらず〳〵の間にしひたげられてゐる澤山の母であり妻であり職業婦人である女性を救はねばならない、世界が持つ大きい寶、子供の爲には此頃いろ〳〵考へられてきたが、それと同時に、其母のために考へることをゆるがせには出來ない。その母なる女性を救つてゆかねば、他の如何なる事業もむなしい。女性と子供を眞に救つてゆく世界が實現されねば、それはまだ〳〵眞に美しい、理想の世界ではない。

母のうたへる

めづらなるものゝ百千も得たるかに　母故われはほゝゑまれつる
ほこらひと榮えとにみちてわれははや　母とはなつて子も抱く哉
人の子の母とはなりて人の子の　その人の子の子をいだくかな
うれしやなまみの色まで君に似し　わがみどり兒に絶えずみとるゝ
大海に舟一つおく心地して　吾兒のそだちのいとど待たるゝ

（ならえ）

母親

木村てるよ

子供よ、

私が結婚したことによつて、やがて生れて來なければならない私の子供よ。お前が生れて來るのが何時であるか私は知らない。私達の心が、愛戀の思ひに熱く湧きたつてゐる新婚の日か、それとも決してとりかへすことの出來ないものに、おたがひの心の死んだ將來の日か？

けれども、私は近頃大きい不安にとらはれてゐる。それは、私ははたして私の一生、この結婚生活をつゞけてゆくことの出來る人間であるかと云ふことだ。併しその半面には、木村に對する思ひが、よしんばどんなに苦しみであつても、私は、彼を去るまいと云ふ心がある。その二つの烈しい戰ひに心をまかせるとき、私の胸には生れないお前と云ふものゝ姿がうかび上つて來る。あゝ、私は語らなければならない。

婦人職業相談

働らきながら勉强する學校を

この希望者が非常に多いやうですから纏めて御回答申します。四時退けの勤めの方や、夜の時間を許して貰ふ約束の家庭にある女中さんで、(一)何うか働らきながら女學校程度の學問がし度いと云ふ方(二)嫁入り前の裁縫の稽古を、働らきながらやりたい方(三)今の職業よりもつと技術のある職業に進む爲め、働らきながら別に修業を勵み度い方(四)女子の專門學校へ入る、資格の檢定試驗に應ずる準備をなさる方等に都合のよい夜間の女學校と、第一及び第二の希望者に都合のよい夜間女學校又は午後の女學校、

▲大乘女學院（府下巣鴨庚申塚六一六）本科三年（一時より授業）專修科三年（午後五時より）

私が持つてゐる、人の世の運命と云ふもの丶不可思議な力を、そして私が まだ母さんの腹の中にゐた頃の、その頃の涙とさびしさとを！

子供よ。

じつときいてくれ、これは、一人の私がお前を通じて人の世の若人に叫ぶ泣き聲と恨言である。

私の母さんはいま、生死不明である、私の父さんが二十三の年、北海道の札幌で役所に書記をしてゐた。その頃、町の藝者の「だるま」と云ふのがたしか十八の一本になつたばかりの時、酒のえにしにたはむれて二人は末をかわした仲となつたのだそうだ。そして恥ぢと悔ひと恨の中に私が生れなければならなくなつた十ヶ月の間、私の母さんは、父さんにすてられて大きなおなかで勤めに出たのだと云ふ。あ丶、私は泣く、聲を上げてなく。魂の成長と肉體の成長に加へられた幾多の暴虐な男のことを、私は思つてみることさへさびしい。まして、私が生れて來ると云ふことは、純眞な父さんに母さんをすてさせ、母さんの雇主やお客を失望させ、まして母さんから若さと面目をうばひ、その涙と悔とさびしさをしみ〴〵味はせなければならなかつたのだ。

▲菊坂女學校（本郷區菊坂女子美術學校内）本科三年、豫科一ヶ年（午後五時より）

▲大妻夜間女學校（麹町區上六番町大妻高等女學校内）本科三年（午後五時より）其の他裁縫花學部英語科、洋服科等（一ヶ年乃至一ヶ年半）

▲晩香女學校夜學部（府下巣鴨町三丁目）本科一ヶ年（午後五時より）

▲東京女子專修學校（本郷區竹町渡邊裁縫女學校内英語科（二ヶ年）裁縫科（一ヶ年）

▲帝國女學校（小石川區大塚町帝國女子専門學校内）本科二ヶ年（午後一時より）

▲愛國女學校（麹町區牛ヶ淵九段下愛國婦人會内）本科三ヶ年（午後五時より）

▲基督教女子青年會夜學部（神田區北神保町 基督教女子青年會内）本科三年（午後五時より）

次に第三の希望者に都合のよい職業學校で、夜間部のあるもの、又全然

子供よ。

私は、自分のはり切つたからだに湧きかへる血潮のさゝやきをきくとき、浮き勤めに泣く十八の妊娠藝者の姿を心にえがく。私は白くむつちりとした私の肉體に、青春のうたのほがらかさをきくとき、生れたばかりの子をかゝへて泣く流行つ子の末路を見る、小説によくあるやうな雇主が、くわえぎせるで私の母さんをなじつてはゐないか！美しい故の仇し男が、私を抱く母さんに、みだらな云ひがゝりをしてはゐないか！私はそれを思ふと堪らない氣がする。

子供よ。

けれども私は生れて七日目に、父さんの父母に救はれて、旅を流れて北の厚岸へ行つたそうだ、そして父さんに妹達の母さんが來た時、その子になつて入籍されて、押しも押されもしない一人前になつたのだつた。私の母さんは、その後どうなつて行つたか、秘されたことは伺ひたゞすことも出來ずに、私は木村と結婚してしまつた。

子供よ。

私はいま、泣きながら叫ぶ。世の若人よ、まつしぐらに戀せ。然し、

夜學校のもの、

▲日本女子商業學校夜學部（麴町區土手三番町日本女子商業學校内）本科一ヶ年（午後五時より商業珠算簿記）

▲大原簿記學校女子部（神田區美土代町）商業珠算簿記別科（自由）（午後五時より）

▲博和女學校（芝區三田四國町三番地戸板裁縫女學校内）普通科二年、高等科一年（商業）（午後五時より）

▲東京女子專修學校（小石川上富坂三九東京女子商業學校内）一ヶ年（商業）午後四時より

▲正則英語學校（神田錦町三丁目）自由（英語專門）午後六時より

▲水原產婆學校（神田區表猿樂町十二）六ヶ月（產婆試驗準備）（午後七時より

▲高田女塾（麴町區元園町二の三十三）自由（英語專問）午後五時より）

▲外語協會學校（麴町區有樂

自分の中に生れて來る子供を悦び迎へる仕度がない人は、どうか人類のために、人類のために肉體のよろこびを持つてはくれるなと。私は叫ぶ。泣きながら叫ぶ。よしんば明日の食ふものゝない生活にあつても、子供の生れて來ることが悦びであり得たならば、子供に對する母親の責は立派になされたのではないか！と。

私はお前がもし、私のからだに來てくれたならば、どんなに希望とよろこびでこれをそだてるであらう、その希望も悦びも、世の母のそれよりも倍かけて。これは私の上にある運命の力に對するせめてもの反抗ではないか。

子供よ。

私は悔ひと涙の中に、あらゆる侮りをうけて生れて來た。だから私は、光明と感謝で、お前をうんで見せる。きつと光明と悦びとでお前をうんで見せる！

私の母さんは生死不明だ。生きてゐるか、死んでゐるか。どのやうな人であつたか、私は何一つ知らない。唯、私は藝者の子である、と云ふたつた一つの他には。

町）外國語、タイプ（英邦）（午後五時より）

▲邦文タイピスト養成所（芝區三田巧運町八） 邦文タイプ（午後六時より）

▲相互タイピスト女塾（麻布本村町一八）個人教授（英佛語及タイプ）夜間

▲第一外國語學校女子實用英語科（本郷金助町第一外國語學校）一ヶ年（英語專門）午後一時より三時

▲東京市立夜間牛込實務女學校（牛込市ヶ谷山伏町市ヶ谷小學校內）（高卒三年、高女卒一年）（商業、製圖、技藝、ミシン、洋服（午後五時より）

▲東京府教育會附屬教員保姆傳習所（小石川區竹早町東京女子師範學校內）年限樣々、保姆尋常科正教員、專科教員養成（五時より、但し土曜だけ午後一時より）

▲この四月より開校されるものに

私は心がさびしくなつて來た、私は母さんに逢ひたい。しみ〴〵と逢ひたいと思ふ。けれどどうして逢ふことが出來やう。なつかしい母さん、けれども私の生命を涙と悔とで暗くした母さん、母さんの一生を失はしめた父さん、すべてみな、すべてみな涙の他にはない。

子供よ。

私が、たつた一つの希望は結婚であつた。そして私が母になることであつた、母になつて、私が再生することであつた。

再生！再生！これより他、どこに生きてゆく道があらう。私は魂のかぎりお前を愛する。お前のそばに一生ついてゐる。お前の生命を私のつかみ出した心臓で明るく彩つてやる！あゝその他に何があろう。

子供よ。

私は云ひたいことを云ひつくしたやうだ。母親にすてられ、父には愛されることなく、まして運命から受けた反抗と皮肉との性格になやみながら、悲哀を愛する二十一の私は、木村を得て人の世の孤獨を知つた。ほんとうの孤獨を知つた。愛されやうとして、人々の間を乞食のやうにほゝつき歩くのを止めやう。私の才氣を愛してくれる人はあ

府下下澁谷常盤松高等女學校の女子工藝學園（夜間）築地の府立工藝學校の夜間實務專修學校の婦人製圖科

第四の希望の方には次の二校が最も適當です

▲夜間文化女學校（麻布廣尾町順心女學校内）修業二ヶ年（尋常卒業ならば何人も入學し得る）この卒業生で大正十二年度に七名、大正十三年度に十六名の專檢合格者を出してをります

▲岩佐高等女學校（牛込區天神町）（受驗科一ヶ年、午後五時より）この受驗科よりも相當每年の專檢合格者を出してをります

つても、私の魂を愛してくれる人はない。私の肉體を愛さうとする人はあつても、私の魂を愛してくれる人はない。然し、それは人の世の必然のことではないか。私は失望をしない。孤獨を味はう。そのどん底から生れて來るものは、私の失つた溫かさと、人を愛する愛との、二つが完全にも融合した母性愛である。私はたつた一つ重ねて云ふが、お前を生んで再生するより他はないのだ。

子供よ。

お前は私に來たことを悔ひないでくれ。

お前の生れて來るのは何時か、私は知らない。けれども私は、お前の人生への第一歩を、つかみ出した私の心臟で彩つてやらう。その時私が、どんな場合にあつても、どんな境遇にあつても、私はお前を祝福することを約束する。

あゝ、私こそ、生命をかけても人の世のおもわくからお前を救ふ事の出來る女なのだ。そしてその私の再生こそ、母親を奪はれた私の運命に對する唯一の反逆である。

無産階級よ

悪法案を撲滅せよ

怪しげなる普選の交換に治案維持法案を出すものは誰ぞ

眞に治案を紊し社會不安を醸すは支配階級の專制政治に非ずや

治安維持法案を撲滅せよ！

婦選なくして眞の普選なし！

三千萬の

女性は叫ぶ

- 參政權を與へよ
- 市町村公民權を與へよ
- 結社權を與へよ



悲慘な姉妹たちのために

——淺薄な反廢娼論者を怒る——

小川八重

私は賤しい稼業の一藝妓でありますが關西聯合婦人會より發行の「婦人」一月號紙上に北村兼子樣の「廢娼運動を瞥見して」を拜見して耐え難い憤りを感じました。藝娼妓の名の下に同じ同性の人々からさへ特殊な者のやうにぶべつされてゐる悲慘な姉妹たちのために、默つてゐることが出來ないので拙い一文を捧げて愛に生きる皆樣へ訴へます。

廢娼問題の理論に就いては今更言ふまでもありますまい。しかも愛なき冷酷無情の人々は名を社會の秩序に借つて虐げられた姉妹たちの上に猶も殘虐のしもとをふるはうとします。私はさうした人々に言たい、廢娼の根底は社會の秩序をたもつためでなく、美しい人間の隣人愛から生れたものであることを。社會のためであつたら、同じ姉妹たちを生きた屍と化してもよいと思ふ人面獸心の人は兎も角、一滴の涙をもち人間の心をもつ人であつたならどん底の生活にもがく姉妹たちのために、義憤を發しないでは居られないはずだと思ひます。

廢娼を實行したならば「社會の暗黑面は一段の暗さを加へ」「其の結果日本に處女が殘るであらうか」と言はれてゐますが、その言葉が眞實であるとしたなら、全國五萬の妹姉たちは社會のために、日本の女性の貞操のために自分の心身を捨てたたふとい犧牲であります。凡ての同性は彼女たちのために最大の尊敬と感謝を捧げればならないはずです。しかも尊敬と感謝の代りに彼女たちがえたものは極度のぶべつと憎惡でありました。之は何といふ矛盾でせうか。

本能は枉げることが出來ず男子の亂行が止むを得ない社會苦であるとしたなら夫は凡ての女性が背負ふべき十字架であります。惠まれた境遇に生れたるが故にその苦痛を味はないのは何故でせうか。

凡ての女性が互ひに頒ちあつて背負ふべき社會苦を、限られた少數の姉妹たちに押しつけて知らぬ顏をしようといふのは餘り不合理非人道だと思ひます。

廢娼は「嫖客も無論好まない」といふが如きは論外としても、「娼婦自身も廢止を好まない」といひ「一度方針を誤まつた女の進路は同一に進み決して歸らぬ」といふのは餘りに姉妹たちを馬鹿にした言葉であります。一體何を根底にしてそんなことを言ふのでありませうか。たとひ冷酷

な社會の人々が一度寃罪に陷つた姉妹だちを浮ひ上らせないのが今日の事實であるにしても、可憐な姉妹たちは決して自身の生活に幸福を見出して居ません。滿足してはゐません。(ここまで書いて來たら思はず涙がにじんで來ました。)悲慘な娼妓の生活を見たことさへなく、彼女たちの眞實の心にふれたこさもない者が、好い加減な當推察から『自身も廢止を好まない』などといふのは餘り亂暴です。廢娼に反對する人々はまづ自ら公娼さなつてその苦痛な生活を味はつてからにしてほしいさ思ひます。その勇氣をもたないものは廢娼反對を叫ぶことが出來ますまい。自分自身背負ひ切れない苦しみを他人に強ひるのは無理ではないか。

新聞で男女共學のために演壇に立たれた北村樣の寫眞を見ました。男女共學は大變結構であります。たゞ貴女方の背後には何の敎育も受けられない藝娼妓の姉妹があることをおぼへて下さいませ。ここには盛門中學の教育どころか　教育さへ滿足にうけられない人が多いのです同じ女性の中にかうした教育の機會不均等があるのを忘れたなら貴女方の男女共學の叫びは一つの物笑ひさなるにすぎますまい。

私は同性の敵である北村樣が婦人運動者の仲間であり、熱心な廢娼主義の人々が夫を默つて居られるのを不思議に思ひます。(『婦人』より)

本文の北村兼子さんとは、大阪の關西大學がもつ唯一人の女學生さして有名であります。今、法律を研究してゐられます。その『廢娼運動を發見して』に就いては、私も小川八重氏さ全然同感であるが、かういふ反駁文が反つて篤學な氏の社會意識を呼び醒す機縁を與へるであらうさ信じます。『未だ系統立つて法律を修める婦人のないわが邦で、私がやりかけたのは何も奇を衒つてではない。國事艱難內外多事の秋に私を家庭に留めて火吹竹を吹き乍ら入鍋に悲憤したり、お汁の加減をみながら婦人參政を考慮せしめたりするのは餘り酷であるさ思ふが故に、何千萬かの女性の中で桁を外させて貰つたのである』云々さ、中々の意氣込みであります。年若いこの開拓者の前途に私たちは多くの期待を繋ぐ者です。(奥)

言語同斷とは、『ドンモリで口のきけないことです』

警視廳で行はれた活辯の試驗に、志願者約百五十名、此の內には銀杏返しや七三の[illegible]な婦人が約三十名、十五六の年若な華やかな小娘も二三人交つてゐた、課題は『單刀直入』だとか『安寧秩序』『言語道斷』の假名附さ解釋さだが、單刀直入とは『短刀を持つて強盜に入ること』安寧秩序は『支那料理です』言語道斷は『ドンモリで口の利けない事を云ふ』とは考へたものである。又『ほのぼのと明石の浦の朝霧にしまかくれゆく船をしぞ思ふ』さ云ふ和歌の解釋には、全く言語道斷なのがあり。口頭試問で『一ヤールは何尺か』の問に『十四か[illegible]』保育大笑ひ。又女辯士の方の試問に『良妻賢母』とは何ださ聞かれ、一人も答へが出來なかつたのは心細い。(讀賣より)



女子學生聯盟とその運動

委員 日本大學生　糸井知余子

聯盟の生れた所以

女子學生聯盟の一團は何のために起つたのであるか？問者に答へて、私は次のやうに答へたいと思ふ。

女子學生聯盟の運動の目的は既に周知であらう通り、直接には我々の社會生活に、延いては内部生活にも關係するところの女子教育の向上、現在の不完全なる教育機關の下に虐げられつつある同性の進路を開拓しやうとするものである。今より數ケ月前から、日本大學内に寄々に協議されつゝあつたこの問題は更に早稻田東洋各大學の女子學生が加はつて、昨年十二月一日此處に初めて各大學女子聯盟の組織を見るに至つたのである。（一月の下旬、關西に宣傳に行つてから、同志社大學、關西大學の女子學生との聯絡がとれたから、この運動は全國的な聯盟になつたと云ふ事が出來る）

不合理ではあるまいか、この現狀は

われ／＼は内外共に貧しい一學生である。この貧しい學生によつて組織された聯盟は、成立後日も至つて淺い。從つて我々の見方なり、運動の方法なりが何の程度まで當を得たものであ

るかどうか、は疑はしいものがあるかも知れぬが、然し、われ〲としては、多くの先輩諸氏に教へ導かれ乍ら、われ〲の所期の目的を貫徹するまでである。

目下大學本科に於ける女子聽講生の取扱に就いては、學校當事者が之を申請すれば、文部省に於ては東北大學の例もある事であるから、本科生として男子學生と同等の取扱ひをすることを絶對に許可しないといふことは出來ないといふ。既に女子のために門戸を開放されてゐる大學も、二三はあるのであるから、これは全然道が無いといふのではない。

ところが其の階梯であるべき專門程度の學校及び大學專門部の現狀はどうかといふに、女子だけの學校はないでもない。然し年齡なり境遇なりの制約は、同時に我々の知識欲の制約でもあるのだ。學校の數からいつても、研究の方面、程度、收容人員、時間等種々な方面から見て

次に揭げるのは、委員が三回目に文部當局を訪問したときに於ける栗屋專門學務局長との對談中の一節である。

栗「問題を起すのは、やはり千人に一人か二人位のものであるが、當局としては之等の間違さへ生ぜぬ方法をとらればならない」

委「それでは、先刻過渡期の女子は犧牲になつても止むを得ない、といふ事でしたが、その救濟は、最も少數の犧牲者によつて、大多數のそれを救ふべきではありますまいか」

（といふと、急に栗屋氏は非常に怒つて）

栗「では勝手にしたらよいではないか。勝手にし給へ」……

稍あつて、

栗「男子の學校に女子を入學せしめることになれば、女子の學校にも男子を入學せしめなければならない。その場合には甚だ不自然なものになるではないか。又從來男子に對して從屬的立場にある女子が男子の學校にはいつて、更に眼下の地位に立ちたいのか」

委「女學校或は其他の女子專門學校卒業者で、より以上の研究を望むもの、若しくはそれらの學校では研究の出來ない方面の研究をやる者の要求が、現在の制度では滿されないのです。又從來の女子の立

現代の女性の燃えるやうな知識慾を滿すべくその門戸は餘りに狹小なのである。其の他にある機關といへば、男子の學校であるが、此は我國で唯一つ音樂學校を除いては、女子の入學を法の上で認めてゐるものはない。

然も事實に於ては、現在日本大學に約百名、東洋大學に七十名、早稻田に十名足らずの女子學生が、特科生として在學してゐる。

「どうも學問をした女は……」などゝいふ男の言葉は、今の世に何の權威があらう。蓋し、かく言はしめたその人は、學問の殼だけを身に着けてゐるのであつて、これこそ學問の爲に、また眞にこの道に進まうとする女性への冒瀆でなくて何であらう

大學の聽講生、聞えは好いかもしれないが、此等大學に在學してゐる女子の大部分は夜學生なのである。晝間はそれ〴〵の職業勞働にいそしむ職業婦人なのである。

職業婦人として實社會に打突かつてゆけばゆくほど、自己の無力がはつきりと意識されてくる。同時に止み難い知識慾は、職業を以て生活の全部とすることに、大きな不安と焦燥を感じさせないではおかぬ。進まずに居ることは、罪惡のやうな氣さへするのである。

斯うした境遇にあるわれ〳〵女性の當然の要求を滿すべき機關が、わが日本には何處にもない。我々はやむなく、正式には認められぬ學生として、聽講生としてでも男子の學校に入るより外に、われ〳〵の求學心を充たすべき道はないのである。

弱き者の名を以て呼ばれる女性が、嚙るべき脛もなければこそ、晝間職業の爲に身を碎き心を勞したその上に、生活苦に脅かされ、誘惑に邪魔されながら

も春の夜、夏の夜の明け易いのをかこちつゝ勉學するのである眞劍でなくて出來やうか。再び歸らぬ若さなればとて、何處にそれを享樂する餘裕があらうぞ

我々の實生活は、實に血の出るやうに切迫したものである。であるから、身も心もそれに堪へて卒業期まで踏留まる人は、必ず入學當時の何分の一かに減じてしまうのが常である。だが、その何分の一かの女子學生は、男子と同じ教室に同じ講義をきゝ、同樣に試驗を受け、同樣に論文を出して進級し、卒業をするのである。にもかゝはらず、如何に優秀な成績をもち、實力があつても、女子であるが故に本科生とはなれず、又、卒業しても男子に與へられる教員免許狀の如きを與へられないのである。

私共は遺憾ながら、中學校と女學校の卒學生の知識の程度が同等でないことを認める。けれども、そのために女子の能力は男子よりも低いといふ証明には

場は共學によつて更に從屬的立場に立つのではなく、反つて男子と同等の地位に引上げられるものであり、又異性に對する理解は、從來あり易かつた誤ちをも少くするものであります。それでこそ、知識、感情、意思、何れの方面からも、女性は救濟され、男子も滿足し、社會の爲にも貢すべきではないでせうか」

栗「學生は學問の研究をすべきもので、斯樣な運動を起すべきものではない」

委「學生としての本領は充分解つておりますが、甘んじ得ない現狀を、誰も進展させて吳れる者がありませんので、止なく自ら立たなければならないのであります」

栗「學校の態度は卑怯だ。學生をそゝのかして當局に當らせるとは。從來、男子學生の運動は多くさうである」

委「他の場合は存じませんが、吾々の運動は自發的に起つたもので、決して學校の指圖ではありません」

更に、日本大學、早稻田大學、東洋大學に於ける女子學生の在學人員、部、科等の問ひに答へ、大部分は夜間學生なる旨を告ぐれば

栗「夜間の男子共學とは以ての外である。勿論文部省では、一も二もなく反對である。當局さへも大部分不贊成であるのに夜間などゝは、場合によつては、現在入學してゐるものも出さればならぬかも知れぬ。自分一個としても、夜間はいふに及ばず晝間も不贊成である」

なるまい。裁縫だの、家事だの手藝だのといふ技術的學科目の爲めに每週十時間近くも費されてゐる今迄の女學校、家庭に歸つても、亦中學生よりは雜勞役の負擔の多い女學生としては、これはやむをえないことではあるまいか。

然し我々は女學校を卒業して中學校卒業の免狀を要求してをるのではない。男子學生と同じ取扱ひにて女子學生をも入學させてゐる以上は、男子と同等の實力さへあれば、同等の資格を與へても差支へあるまいと思ふのである。

試驗檢定はたつた一回の成績を以て、男子にも女子にも免許狀を與へるではないか。文部省の管轄だからといつて、二年間學んだ臨時教員養成所の學生に三年學んだ大學の女子聽講生以上の力が出來るとは限るまい。

將來女子の爲の特別の設備をすることも良からう。女學校の程度を高める事も勿論必要だ。だが現在救はれやうのないこの種女子學生の進路を拓くことは當局の急務であり、社會の當然の責任であらうと思ふ。

終りに、知識慾に性の差別があらうか。私共の要求は、目まぐるしい許りに進展して行く社會の推移に伴ふ所の、當然すぎる程當然の要求であると思ふ。

とはいへ、長い／＼傳統の上に、力強く打建てられた今日の社會組織が何でさう易々と動かうぞ。況して我々同志の大多數は、時間的にも物質的にも惠まれてゐない半職業婦人、半學生といふ慘めな境遇にあるものである。その上、ひたすらに力と賴むべき當局の態度は、心細い限りではないか。良き時代は良き母によつて生み出されるものであることを、何故人々は考へないのであらうか。

職業婦人の食養生

職業婦人は短命であるとか、病氣にかゝり易いとか言ひますが、相當の注意さへすれば、朝早くから

一日忙しく働く事は、身體を壯健にし、抵抗強くなる事は當然であります。唯活動に慣ない身體を、從前通りの考へで激しい務めに服させる爲に疲勞するのであります。

婦人は常に暖かく保つ事を考へるのが第一です。ですから食物も、暖かい物であると同時に、食べてから身體を暖めるものである事が必要で、例へばうどん類、おさつ類が一番よいのです。結核患者がさつま芋療法で根治出來る程です。又一日の副食物中に

馬鈴薯をとり入れる事も大切です。外とに出て働く人は、晝食を外でとるのですから、如何いふものをとつたらいいかと申しますと、シチューのやうに野菜をごた〳〵煮たもの等は一番結構です。神田橋の側にある公衆食堂でよく出る、豚の入つたごた〳〵煮などは申分のない榮養食であります。女の人は外に出て、ものを食べに入りにくいため、晝食をしなかつたり、一片のパンですます場合が多くありますが、それは其時は何でもなくつても

必ず何時か影響して疲勞を増す事になります。それから就床前に少量の酒をとる事をおすゝめします。寒氣酷い時、疲れ易い人は、殊に實行すると目に見えて効能があります（村井政善）

原稿を募集します

論文、時事批判、感想、反駁文、諷刺、創作、飜譯、詩歌、漫畫、

全て長すぎるものは掲載する事が出來ませんから御注意の上當つて御投稿下さい。

猶、採否は當方に御一任の事

誌代の前金切に就て

誌代の前金が切れた分に對しては、帯封に「前金切」の捺印をしておきますから、どうぞすぐにお拂込み下さい。御送金は振替（東京六四一六〇番）へお拂込みになるのが最も安全で、簡易です。

職業婦人界音信

◇女子學生聯盟委員　はみな昼間それ〴〵の仕事を持つて働きながら、日本大學や東洋大學などの夜學に通ふ苦學の職業婦人である。夜學に通ふことさだけでさへ勤務上の妨げになるさいふので雇主側で喜ばぬ人が多い位であるから、共學運動に少しでも働かうさする事は、勉學の時間を削るより外に途がないので、餘程困難の多い仕事にあたつてゐるわけである。

○

◇丸ビル婦人會　一人や二人の淫亂な婦人のために、丸ビル全體の婦人が誤り見られることは迷惑である、さいふので、健實な職業婦人を中心にして發會。婦女界の太田菊子氏、丸ビル美容院の山野千枝子氏、婦人公論の井上三保子氏、その他の諸氏がその發起人の顏觸に入つてゐる。

○

◇遞信省從業員　芝岡西久保巴町の東京遞信講習所では一年に三回宛、管内一府八縣(關東諸府縣と靜岡山梨)から生徒を募り、一回に二百名、内男百五十名、女五十名、一ケ年間の講習中も日給七十錢を給して、講習を卒へたものは郵便、電信、電話局等へ配屬されるのであるが、應募者も當に數倍に達する代り採用申込も非常な勢である由。

○

◇電車に女車掌　東京市電氣局では、三月より電車内に補助車掌として女車掌を採用する事に決定、第一回の應募者中より四十名を採用して目下養成中、採用された女車掌の大部分は地方より上京した婦人中に既婚の婦人も一割五分あり。更に續々募集する筈。

なほ、補助車掌さして、將來車掌を志望する少年なら採用する計畫ある由。

○

◇女車掌に反對　東京市電氣局從業員組合では、電氣局で女車掌を使ふのは、この失業者頻出の不景氣の時に一層男子の失業者を多くする事であり、女車掌の補助は能率が上らないから、反つて男の車掌を過勞に陷らしめるばかりである、等の理由より反對申立の由。

○

◇女流飛行家が活動俳優に　木部しげの氏(二三)は活動俳優になつて、お手のものの飛行機で空中を飛び、地上には自動車、

オートバイ、乘馬、水泳といふ風な新しい冒險技術で婦人の新職業の開拓。

○

◇**貧しき未亡人を保護せよ**　東京社會事業懇談會では、父親のない貧しい家庭から多くの不良少年少女が出る事實より推して、寡婦の保護を徹底的に行渡らせる必要を痛感し、建議案として寡婦保護法案を提出するために調査中、因に、現在保護されてゐるのは、陸海軍軍人及び官公署に勤續した者の未亡人十三萬人にて、保護せられざる者は遙かに多數の見込。

○

◇**大妻に夜學高女**　東京市内に夜學の女學校にあつても、卒業後高等女學校卒業者と同等に專門學校の入學資格や、中等教員檢定受驗の資格は與へられないために不便が多かつたが、今度大妻技藝學校第二部で、五ヶ年卒業の夜學の高等女學校が文部省の認可をうけた。尋常卒業者は一學年に、高小卒業者は三學年に入學し得る筈、目下各五十名を募集中。

○

◇**女子に開放した大學**　明治大學、專修大學、九州帝國大學、農、法、文學の正科生では、各々女子のために開放。岡山醫大では、女子醫專の卒業生に限り聽講を許す。

○

◇**愛國婦人會隣保館で内職紹介**　不景氣がひどいので内職を探す婦人が激增したので、愛國婦人會の隣保館では、從前よりも、もつと積極的に内職志望者のために各種の内職をそなへて援助する由。なほ、夜間の女學校及びミシン、和服裁縫の手ほどきを初めた。

○

◇**市社會局で短期職業講習**　職業婦人の激增にうながされて、東京市社會局では婦人のためにも短期の職業の講習を行ふことに決定。さしあたり簿記、速記、計算事務等。

○

◇**少年保護婦人協會**　少年保護と母性愛を標語として鳩山、下田、嘉悦、吉岡、本野等各名流婦人の發起にて此の度發會。

○

◇**婦人辯護士の採用願ひ**　四年前に實施された高等試驗令に依ると、受驗資格は必ずしも男子に限られてないことが判明した。

北信―福井―關西への旅

奥むめお

一月末、政治研究會北信支部の發會式に招かれて、出かけました。例に依つて私の荷物は、赤ん坊の紀伊ちやんと、そのお襁褓やら着換へやらと、數冊の書物とです。屋代は寒村と云ふにふさはしい、寂しい〳〵町でしたが、そこに集る青年男女は、みな、非常に純朴で、而も、社會的正義感に燃えてゐるやうな人ばかりでした。南信にも、すでに澤山の力强い友人を持つてゐる事を喜んでゐる私は、今また北信の地により多くの已知、未知の途づれを見出して、喜びに溢れるやうな思ひがしました。宿を長野の北原太郎氏方にとりましたが、氏は、複雜な人間味をもつた、面白い人であります。ゆつくりと長野在住の知名の婦人諸姉にお近づきを願つて歸り度いと思ひましたが、時がそれを許しませんでした。

福井へ

今度の歸國は、私にとつて、實に十年振りの正月を、田舍で迎へることとでありました。雪、霰、氷柱、雪深い福井の正月を、あゝもあらう、かうもあらうかと、想像をたくましくし乍ら、直江津、糸魚川、高田と信越線をガッタン〳〵やつてゐます間、私の心は、手に持つてゐる新聞の記事も目に入らぬほど、なつかしい昔の思ひ出に一杯になつて落付かないのでした。さうして家に入るなり、

「お雜煮だ、お雜煮だ」

と催促をして、みんなに笑はれてしまひました。あの寒國の味噌汁のお雜煮、大きい、丸餠のお雜煮、かぶら、かつをぶし、等、々、々、こんな事を書いて行つたら笑はれるかも知れませんが、實際十年振りに舌の上にのせたあのお雜煮が、どんなにをいしかつたか、今、心の上に壓しかぶさつてゐる全ての心がかりも、慨きも、怒りも、みんな一緒にとろけ込んでしまふやうな思ひがしました。

坪川冬村兄は、福井で「啓明」を發行しつゝ、郷土の婦人解放のためにも、心を盡して努めてゐられる仁ですが、會つていろ〳〵話し合ふ喜びで一杯になつてお訊ねした處、上京中との事、實際がつかりしました。

大阪にて

歸途大阪に出ました。

御宿を願つた桝合寅吉氏は、大阪に於ける政界の新人として聞へた仁ですが、今度、その家族の一人格になつて長逗留をして——紀伊ちやんが、大阪着と同時に發熱して、風邪をひき込んだので、いろ〳〵と御世話になつた事をこゝに感謝します——氏が社會的にも政治的にも、遺憾なきまでに力を傾けてつくしてゐられるその反面に潛む夫人の内助の功は、親しく夫人に接した私には非常に敎へられる處が多うございました。(私がこの夫人より敎へられたかず〳〵に就いて、項を改めて書き記す折をもちたいと思つてゐます)

婦人の公民權とは何か

久布白落實

> 一九二三年ローマに開かれた婦人参政權大會のさきの發表によると、その時までに、男女平等に参政權をあたへられてゐる國が世界に二十四ヶ國、女が市町村の公民權だけしか持つてない國が三ヶ國(セルビヤ・ベルギー・ルーマニア)であつた。わが日本は、この世界二十七ヶ國のお仲間入りも出來ない特殊國である。我が民法市制第九條に依ると、市町村の公民とは、帝國臣民たる男子にして、とある、女子は公民ではないのである。
>
> 東京を中心とした婦人参政權要求の團體では、今年も、公民權を與へよ、といふ運動に熱心である。では、公民權とは何をいふのであるか?

一

市の市民として、又國家の公民として立つことは、我等日本婦人にとつては、一つの新らしい事業であります、これを我國の古代の歴史に求めても、二千五百年來未だ一度も其の經驗を有して居ませぬ、從つて私共が時代の要求として又内に湧き起る、止むにやまれぬ心のさけびとして之を求むる時に、そこに一種　未開の世界に對する如き好奇の念と、不安の念とを感じます。

然し、今日私共が求むる處のものは、これは實に、我等の生活の延長であり、且つ我等の家庭生活の完全であることを考へて愈々切實に之を要求する心を強くします、今其行程と、其理由とを次に明記しませう。

二

市政とは如何なる事か、先年外遊の際、私は深き興味を以つて各國に於ける婦人と政治の狀況をさぐりました、持に各國に於て、婦人に對する、政治的訓練について、其の方法の如何を知る事は、私の最も力を入れた所でした、歐洲諸國に於ても、

此の方面に、多少得る處は在りましたが、其最もよき模範は、之を隣國米國に於て發見しました。私は自身、中學卽ち、彼地の男女が、初等教育の後、滿廿一歳、卽ち投票權行使前の數年間に於ける、市民教育を受くる時代の教科書について、親しく學校に出頭し、教師について、其教科書、參考書有ゆるものを借り受け、數日に渡つて調べました、其内市政の一項を熟讀する時に、これが如何にも、我々が日夜、心を碎いて居る一家の經營の延長であると云ふ感を深くします、少しく之を列記して見ませう。

三

市の第一の問題は財政です、卽ち一家の收入に相當します、或ひは百圓、二百圓、又は其營業によりて月に千圓二千圓と云ふやうに、市の財政は、市民の納税によりて、其收入が定まります、東京市の如き、時に三千五百萬　、大に澎脹して五千萬圓、先づ其中間、四千萬圓とすれば、人口、震災後之れを二百萬と見て一人當り廿圓の見當です、先づこれでもつて、一ヶ年の豫算を立てます、次に行政機關です、一家に在つては、先づ主人主婦が、互ひに合議、協力してこれに當りますが、市に於てはこれが當事者は、市長、市吏員、及び市會議員です、この人々が、如上の財政を如何に處理するかについて、年々心を碎くわけです。

却說、一家がこゝに成立すれば、第一に住宅の問題が起ります、一戸を建築するか、賃借するか、市として第一の事業は、やはり建設です、こゝに都市計畫なるものが生れ出でます、震災後の東京　は、新らたにこの問題に面接しました、古き都の東京市は、新らしき試みとして

今や都市計畫の中心に立つて居ります、如何なる都市を建設するか、今日の時代に適し、且つ我が日本の帝都に、適はしきものを建設せんとするには、相當、思慮と努力をそゝがねばなりませぬ。

四

この建設事業中に、住宅問題貧民窟問題が、當然含まれます個人の住宅は都市建設に重大な關係を有します、英國の如き、つとに此處に見る處あつて、市の住民に對し、其建築費の、六割若くば八割を貸與しても、市の美觀と堅實とを害はぬ程度に其居宅を建築する事を、奬勵するそうです、貧民窟の如きすら外觀これを見別くるに困難なるまで、これを一定し、出來得る限り衞生的に、又堅牢に、建築して、之を貸與する方針を取つて居るやうです。ロンドン市を廻つて特に貧民窟を求め歩いても、一見それと氣付かぬ位、注意して、建築して在ります。一軒の家に於て、主人の室も子供部屋も、女中部屋も心を入れて建てゝゆくやうなものです。又市の公園は、一家に於ける庭と同樣、市民の肉體、精神の爲めに、備へられねばなりませぬ。

五

次に、市の生活上の設備ですが、家々で先づ、水の善惡、下水の排泄、汚物の處置、電氣、ガスの設備を要する如く、市としても、市民の飲料水、今日の各都市に於ける水道問題、又下水道の設置、塵埃の處置、電燈電力の供給、ガスの設備等、つまり市民の日常生活に缺く可らざる火、水、の供給、汚物の排泄の處置をせねばなりませぬ。ロンドンに於ける世界的大上水道の設備、巴里に於ける偉大な下水道の設備、ガス、電氣電力の供給は、市として一日も捨て

置く事の出來ない問題です。又日用品供給の場處として、公設市場の設置、日用必需品に對する、公定相場の發表等は、いづれも市民の生活の安定を計るものとして、輕んずることの出來ぬ市の重要な仕事と爲つて居ます。

六

次に、如何なる家も、火の用心をゆるがせにせざる如く、市としては、消防、及び防火の設備は、重大な、仕事として、之れが注意を怠りませぬ、同時に一家の主婦が、常に家族の衛生に心を配る如く、市としては、特に傳染病の注意、病院、避病院設立、清潔法等に、心を配つて、集合生活の安全を計つて居ります。市に在つて、家庭に無いもので最も大なるものは、交通機關でせうか、移動交通機關である電車、自働車、車の如き又固定交通機關たる道路の如きいづれも市として、大なる一門戶を形成して、之れが經營に力を盡します。東京、十五區の道路の面積は約二百五十萬坪、大阪は百六十萬坪です、東京の人口を震災前の二百廿萬として、大阪の人口を百五十萬とすればいづれも一人につき、一坪餘となります、少し東京が、割が廣くなりませう、各々一人當り一坪餘の道路とすれば、これを如何にして、堅固に、美麗に爲し得るか、各々、市民の努力如何に在る事と存じます、道路の善惡は、家庭の主婦には非常の關係を有します、一家のものが、下駄のはげしき傷み方、着物の汚れ丈けでも、これを二百萬市民の數に積れば夥しいものですこれを見積つて、今少しく道路に金を惜しまず用ひたらば、市民の能率はどれ程增進するかと思ひます。

七

最も重要なる事で未だ申殘して有るのは、敎育と娛樂の事です、一家の內には敎育と、娛樂の問題は必らず起ります、市民を擁する都市に於ては、當然これを閑却する事は出來ませぬ。私は先日大阪に參り、同市の敎育費を尋ね、同時に市の遊興費を尋ねました。大阪市に於ては市の敎育費は、經常、臨時を合算して、六百四十三萬圓です、然し當市で費さるる遊興費は、藝妓、酌婦其他を拔きにして、單に、娼妓のみで、一ヶ年一千八百三十萬圓餘です、遊興費は敎育費の二倍八分餘約三倍と申す事が出來ます、娛樂として、公園の設備、運動場、遊戲場等は、將來とても、改良を加へてこれを備ふる必要が有りませうが、公德を損し、病毒を流す、遊廓の爲めに、徒費せらるゝ金が、全市の將來の人材を敎育する敎育費の三倍にも上つて居る事は、大なる考慮を要することと思ひます。

八

斯く考へ來れば市政として我等の前に、禁斷の木の果の如くつり下げられた事々物々は、一つとして、我等の日常生活に關係なきものは有りませぬ、從て之を家庭の延長と呼ぶに、何等の差支を感じませぬ、要は私共が、戶を押し開け一步足を踏み出して、此未踏地に步み入るのみです、私共は今日國民として今日の我が國の市政を思ひ更に進んで國家を思ふ時に、私共が、一家の主婦として、立つ爲に更に進んで一箇の市民として、又一國の公民として立たねばならぬ時機が來たと覺悟せねばならぬと思ひます、然して我國民に對し、眞の自覺を與へ之等の多くの矛盾に反抗して眞實我國を泰山の安きに導く爲に一臂の力を添へねばならぬと思ひます。



鸚鵡

前田河廣一郎

黒ん坊のマグノーリアは、白人の口入屋には、かなり高い周旋料をぼられたが、結局、らくな働き口をみつけたやうな氣になつた。

ブランドン氏夫妻は、どちらも親切さうな若夫婦だつた。

使はれる夫人の若いといふことは、彼女の長い間の下女奉公の睿智が、自然と要求した條件だつた。あるひは、それは、彼女の兩親や、そのまた兩親や、ずうつと遡つて先祖代々の人達が、昔から白人に賣買されたときに感じ慣れた本能であつたのかも知れない。ともかく、ブランドン夫人は、その點からいふと、ほとんど理想的な主婦であつた。かういふことに察しの鋭敏なマグノーリアは、最初口をきめるときから、女學校出の、新婚さうさうの奥さんだな、と一と眼で睨んでしまつた。實際、彼女の新しい主婦は、美しい至極家庭的な婦人だつた。小ぢむまりした郊外の二階家に、買ひ立てのぴか／＼した世帶道

具にかこまれて、まだ奉公人擦れのしない、それでも主婦の威嚴を保たうとしてはをりをり顏を赧らめながらものを云ふ、娘々した夫人を見ると、この人の下にならば一生奉公をしてもいゝ、また、出來るかもしれない、といふ氣になつた。いつたいに、いままで彼女の働いて來た家の主婦は、ぎすぎす勘定高かつたり、いやに高慢ちきに黑人をみくだしたりする、口喧ましい中年の女が多かつた。そして、彼女は、もう白人の臺所から臺所へと、野良犬のやうに職を探がしまはつてあるくのが、つくづく嫌になつてゐた。三人目の亭主が、どこかで友達と飲んだくれて、そのまゝ行方をくらましてから、自分で家をもつといふ望みもなくなつてしまつた。

どうせ黑人を傭ふほどの暮らし向きであつたから、萬事は質素で、豪奢な上流社會のやうな生活はしてゐなかつたが、同じ中流の家庭でも、そこは主人夫妻の若々しさから、すべてのことに何となく派手で大まかな、いきいきとした居心地よさがあつた。

日曜日のほかは、ブランドン氏は、きちんと同じ時刻に起きて、折目の正しいヅボンをはいて、下町の法律事務所へ出勤した。高架鐵道に故障でもなければ、彼は、きつと晩の六時には玄關の錠へ鍵をがちやがちや云はしてゐた。六時半の晩餐は、ぴつたり七時に終つた。毎土曜日の晩、きつと二人は電話で牒し合はして置いて、早目に晩餐を濟ますと連れ立つて芝居見物に出て行つた。かういふ具合に、一家の時間といふものは、この新家庭では、磨きたてのフォークやナイフのやうに整つてゐて月曜日の洗濯、火曜日の熨斗、水曜日の掃除、木曜日の休み、金曜日の器具磨き、土曜日のパン燒き

と、いさゝかも規則に番狂はせはなかつた。日曜日は、ほかの日よりも一時間だけ朝餐が遲く、それが濟むと主人達は、盛裝してもよりの寺院へ通ひ、夫人が白い手套をはめた手に聖書をもつていそいそと歸へつて來る頃には、厨のオーヴンの中から、蒸し立ての鷄がセージの葉の匂ひを食堂の白い卓布の上へ漂はしてゐた。ブランドン氏は、デナーが濟むと、パイプを啣へながら、運動のために、家のまはりの、猫の背のやうに柔かい芝生の上を、草苅車をまはしてあるいた。夫人は、食堂の窓際で日曜新聞の附錄を讀んでゐる眼を、窓下をとほる良人に向けて、をり〳〵片手で接吻を送つたりした。さういふときには、さつと彼女の頭の上で、赤塗の籠に飼つてある白鸚鵡が、ばさばさ羽搏きしながら、

『愛するジョージよ!』

と、主婦そつくりの造り聲で、調子を合はせた。ジョウジは、主人の名前であつた。皿を洗ひながら、かういふ光景にうつとり見惚れるマグノーリアは、しみじみ主人一家の溢れるやうな幸福に浸りきつてしまつて、自分もやはり同じ白人の血統をひいた、この若夫婦の身内の一人——伯母でゞもあるやうな氣がして、二人を自分の肥つた腕にいつしよにして抱き締めてやりたくなるほどだつた。

無口な主人はもちろんのこと、ブランドン夫人といへども、全然マグノーリアの仕打に關して放任主義であつたことは何よりも嬉しかつた。一度などは、彼女の長い間の習慣から、嚙煙草を嚙んでゐるところを、夫人に見出されたが、そんな場合でも、彼女は、

「お前、妙な癖があるのね。」

と不思議がつただけで、べつにお說教を聽かせるやうなことはなかつた。

教會へ行くことについても、一二度それとなくすゝめられたものゝ、さうすることがどんなに料理の時間とかち合ふかをマグノーリアに云はれると、夫人は、彼女の自惰落から無宗教同然な生活を送つてゐることを、突つこんで責めやうとはしなかつた。

良人が出勤してしまふと、ブランドン夫人も規則正しいその日その日の日課に從つて、マグノーリアに任されないやうな仕事を手づからやつた。たいがいの家庭の主婦と云へば、良人がゐなくなると長いこと讀みのこしの新聞に讀み耽つたあげくは、デパートメント●ストアのその日の賣出しを見て方々の友達へ一時間も電話をかけまはり、髮の白粉の着物のゝと午前中は鏡臺の前で暮らして、輕るいランチをそゝくさと食べると、すぐ下町へ連れ立つて出掛けるぐらゐが日課になつてゐるのだが、ブランドン夫人は、八百屋、肉屋への電話の注文やら、良人の洋服の熨斗やら、主人達の寢室の掃除やら、鸚鵡の手入れやらに、ときにはランチの時刻になつても、朝のままの着物でとほすことさへあつた。良人の晝休みの時間の二三分前には、きつと彼女は事務所へ電話を掛けて、睦まじそうな挨拶を交はして居つた。

それでも、一日の時間が、この新婚さうさうの夫人に長く淋しそうに思はれるときがないでもなかつたらしい。さういふときには、彼女は、寢室で白鸚鵡を對手に、いろいろな、若い女だけが自分の

寵愛物に對して敎へこむ愛撫の言葉を云はして見るのが何よりの慰籍であつた。この白鸚鵡は、ことに夫人には愛着をもつてゐて、籠をあけると嬉れしそうに彼女の肩や手へ飛び移つて、よく口移しに餌を貰つたり、懷かしそうに頰擦りしたりした。

「ポーレイ、愛するジョージよ、と云つてごらん！」

「愛するジョージよ！」

「わたしの最愛なる良人よ！」

「わたしの最愛なる良人よ！」

「ほ、ほ、ほ……こんどは、どう？――わたしの最愛なる良人よ、早く歸へつて頂戴。あなたの小さなワイフが淋しいのよ！」

「わたしの最愛なる良人よ……」

廊下を掃除しながら、マグノーリアはよくこんな風の、蜜のやうな愛撫語の反復が、鳥とその女主人との問に交はされるのを、一種の羨ましさをもつて立聽きすることがあつた。

夫人の伯父さんから、結婚の祝ひに贈られたとかで、鸚鵡は、單に彼女の寵愛物といふだけでなくもつと深い意味で一家には尊重されて居つた。

しかし、一度などは、來客の前で、あまりに夫婦愛の籠つた言葉を濫發したので、それ以來めつたに客人の席へは出されなくなつた。

マグノーリアは、どうにかして、自分もこの怜悧な鳥を、手馴づけてみたくて仕方がなかつた。といふのは、主人達が、土曜日の晩やそのほかの場合にでも外出して、わりにひつそりした郊外の夜を自分一人で過ごさねばならぬときには、どうしても誰かと何かを語りあつて夜の恐ろしさをまぎらはさねばならなかつた。暗黒に對する恐怖は、彼女の人種の血に潜む缺陷だつた。それはさうだらう。彼女の祖父にあたるジョージ・カムミンスは、日蝕を見て自殺してはてたほどの迷信家だつたもの。

しかし、ポーレイは、どんなにしても彼女には馴染まなかつた。餌や水で釣らうとしても、鳥は、彼女が近づくと、全身の羽毛を逆立てゝ、血走つた眼で、いまにも鉤なりの嘴を對手へ突刺さうとするやうに、彼女の隙を狙つて身構へた。

しかし、ある土曜日の夜、彼女は思ひきつて、ブランドン夫人のうす衣を着た肩や腕を渡つてあるくやうに、爪痕一つ立てずにポーレイを自分の體へ飛び移らしてやらうと、勇氣を皷して籠の扉をあけ放つた。するとポーレイは、出て來るどころか、かへつて隅の方へ尻ごみして行つて、さし伸ばしたマグノーリアの指先を、血の出るほど嚙んだ。

「こん畜生ッ、くたばつちまい！」

彼女は、何とも云へぬ腹立たしさを感じて、かう生れつきの言葉で叫んだ。これが、彼女と鸚鵡との決闘の皮切りだつた。

鳥と彼女の間には、接近し難い、冷酷な距離が橫つてゐた。彼女にとつては、この小悧かしい鳥が

たかが知れた畜生の分際で、一家のうちに自分をだけ恃むといふことが、不思議でも、忌々しくもあつた。しかし、それと同時に、いかなる手段をもつてしても、この誰が教へたといふわけでもない不自然な敵愾心を、征服してやりたいといふ慾望が、その疳走つた鳴聲を聞いたり、逆毛を立てた姿を見たりするごとに湧いた。自分よりも劣等だと信ずる生物に、一種の毛嫌ひをされることは、堪え難いことだつた。のみならず、心から信服する主家に、ただ一羽の鳥といへども、自分と異分子がいつしよに居るといふことが、既に彼女の心持を不穩にした。

良人と下町で落ち合つて、晩餐をいつしよにしたあとで芝居へ行くと云つて、ブランドン夫人が早目に家をあけたある土曜日の夕方、マグノーリアは一つの計畧を思ひ浮かべた。彼女は、料理用のエープロンをかけたまゝ二階から鸚鵡の籠を運んで來て、臺所のいつも自分が食事をする卓の上へ据る急いで二階へ引かへすと、夫人の衣裳類の掛けてあるクローセットから、ベールのついた小型の帽子を取り出して、エープロンを外づすや否や、輕るやかな足取で臺所へはいつた。

『ポーレイ、わたしの最愛なる良人よ、と云つてごらん!』

出來るだけ主婦の聲音を眞似たマグノーリアはベールの中から命じて、電燈の下にじつと鳥の魂の微顫をだにも見逭すまいとその舉動を打戍つた。腹の中では、もしさう云つたなら、帽子を脱いで、思ふさま鸚鵡に耻をかゝしてやらうといふ下心が燃えてゐた。

鳥は、彼女の聲を、長い思索ののちに愼重に判斷するかの如く、暫らく小首を傾けながら、じろじ

ろ對立者を見戍つて居つたが、何を感じたか、黑つぽい鋭い舌を吐いて、大きく口を開くと同時に、

「こん畜生ッ、くたばつちまい！」

と、奇蹟のやうに覺えこんだ、マグノーリアそつくりな冒瀆辭を繰返へして、く、く、く——ッと嘲笑的に唸つた。

彼女は、不意の怒りに、帽子へ手をかけたまゝ、電燈の下に棒立ちに立つてしまつた。

「お前こそ、くたばつちまいッ！」

我を忘れて、主人の帽子を床の上へ擲きつけると、マグノーリアは、白い大きい眼と齒とをむいて、やつきとなつてやりかへした。

「お前こそ、くたばつちまいッ！」

鸚鵡の言葉は、硝子屑を踏み砕いたやうな奇音で、彼女の顔を刺した。

「お前、お前こそ、くたばつちまいッ！こん畜生ッ。なアーんだ、お前ア、鳥の癖におかみさんに、おべつかを使ひアがつて、朝から晩まで、愛する、愛する、愛するてなこと繰かへしてやがる。この、能無しの穀つぶしの地獄の狂人ひ鳥め！」

かうなると、さすがのポーレイも、手に負へぬらしく、ただ賢しげに、

「さい、さいッ。お前こそ、くたばつちまいッ！」

と空嘯いた。

マグノーリアは、しまひに、ポーレイを見るのさへ腹立たしくなつて、急いで夫人の帽子を拾ひあげると、二階へ駈けあがつて、わざと亂暴にいつもの鐶へ籠を釣るすと、もとどほり帽子をしまつて部屋を出た。鳥は、氣短かな老人のやうな眼で、彼女の一擧一動を凝視してゐるやうに、止まり木の上に居ずまゐを變へた。何となく、自分がこの惡る賢い鳥に負けを取つたやうでならなかつた。

この失敗を招いてから、マグノーリアは、ポーレイの前へ出ると、必らず苛々して、ゐても立つても居られぬやうなへんな氣持に驅られた。何かしら、長いこと身内に潜んでゐる、先祖傳來の強敵に對する執念深い呪ひと不安とが、そのために誘ひ出されるやうに感ぜられてならなかつた。病死したやうに裝つて、毒を嚥ませるとか、わざと近所のブルドッグを使嗾するとか、何とか主人達に知られない工風で殺ろしてやりたいやうな殘忍な復讐心さへもむら〳〵と頭を擡げた。

つぎの主人達の留守の晩には、彼女は、前とはべつに險はしい氣持から、鳥を同じ卓の上へ据ゑて矢庭にあらゆる惡口雜言をついて侮辱した。

『この白ん坊奴、くたばつちまいッ!』

とりわけ『白』といふ色に、本能的な嫌惡を感じてゐた彼女は、信者のお祈禱のあとの『アーメン』のやうに、この惡態をいくども繰かへして浴びせかけた。最初は面喰つた樣子で、眼をきよろきよろさせながら、獰猛な嘴で、口惜しくて堪らぬといふ風に籠の針金を啄むでゐたポーレイも、だんだん、同じ言葉が耳慣れて來ると、しきりにその眞似をしては彼女に應酬した。

ときならぬ喧嘩に、臺所の壁や窓がびんびん鳴るほど騒がしくなると、じつとそれに耳を傾けながら、マグノーリアは、眼に涙を浮べて笑つた。今晩こそは、自分が鳥に對して勝利を博したやうな氣輕るさを感じた。

その晩は、主人達がかへつて、地下室のベットへはいつてからも、彼女は小氣味よく思つて、腹を抱へて笑つた。

翌る日、ブランドン氏が、相變らず庭園へ出て草苅車を押してゐるとき、ポーレイの籠を見あげた若い主婦が、愛禽を優しく呼び掛けると、待つてゐたと云はぬばかりに口を開いた鳥が、

『この白ん坊奴、くたばつちまいッ！』

と、滿腔の憤怒を罩めて我鳴り散らしたことには、彼女もすくなからず驚かされた。女主人の制止の指先に、ますます猛り立つらしい鸚鵡は、夜前の敵對者の術策に正當な復讐戰を試みるべく、もの狂はしく同じ惡態を繰返へし、繰返へした。

そのことがあつてから間もなく、三人目の黒ん坊の良人に逃げられたマグノーリアは、べつにこれといふ理由もなしにブランドン家を解雇されて、再び、白人萬能の街へ黒ん坊の失業者となつて出たのである。（了）

二月号を休刊したあとの三月号がこんなにおそくなりまして申しわけがありません。どうぞお許し下さい。二月号も休刊する積りは少しもなかったのでしたが、一月中旬に編輯をすまして印刷屋にまわしておいた処が、印刷屋の方の突発的事情のために忘られてついに休刊するのやむなき事情になったのでございました。

三月号は編輯が例月よりもおくれた上に、初めての不慣れな印刷屋に託しましたため非常に手間取って、今日出来上って来るまでに丁度三週間を要した次第でございます。

今後はかういふ不行届きがないやうに必ず注意いたします。

御心配をかけましたことを幾重にもお詫びいたします。

▲編輯室にて▼

正月號が大さうよく出來たさ、あちこちから賞められたあとの二月號が休んだのは、私共にさつても非常に殘念な事でした。催促やら問合せやらを下さつた方々にも多謝します。事情はかうなのです——

一月號から、印刷を、近所に在つて親切だと聞いてゐた啓柏社に賴んで、ヤレ嬉しやさ思つた甲斐もなく、二月號の原稿を渡した數日ののち、或事情のために活字がすつかり無くなつたのださいふのです。

○

續いて二三の外の印刷屋に交渉したのですが、直ぐ取掛つてくれる處がなく、やむをえず、三月號さ合併にして二月中旬に發行しやう、さうすれば三月號から書店にも出せる、さ、かう思つて決めたのでしたが、その間十日程の餘裕を利用する積りで旅に出たところが、あいにく赤ん坊が病氣をして歸京がのび、從つて、三月號までこんなにのびてしまつたのです。四月號は必らず早く發行して（而も發行部數はこれまでの二倍）廣く一般の書店に出さうさ、今から準備中でゐます。着實な一歩々々を發展してゆくわが職業婦人社の仕事を育んで下さい。

○

學校の卒業期をひかえて、多くの婦人雜誌はまた婦人職業問題の記事で山盛りの有樣です。地方にある方々は、どうぞ新聞や雜誌の記事にみるやうな華かな職業婦人振りにあこがれて不用意に家を飛出すやうな事は、必ず愼んで下さい。今日の職業婦人の生活の實際は、いよ／＼職業婦人問題の痛切なことを思はせ、わが職業婦人社の仕事の益々重要なことを痛感させるばかりです。

○

家庭に在る婦人の惱み、職業に就いてゐる婦人の怒りさ悲しみ、この過渡時代に生をうけて、困難な世路を横切つてゆかねばならぬ私たち婦人の生活よ。然し、私たちは、惱みにも、悲しみにも、怒りにも、溺れますまい。それらを打越えて、私たちの輝きある途を切り開いて進みませう。（わかぐさ）

定價

一部	金二十錢	（郵稅五厘）
半ケ年	金一圓二十錢	（不要）
一ケ年	金二圓四十錢	（不要）

廣告料

特等	（一頁）	四十圓
一等	（一頁）	三十圓
二等	（一頁）	二十圓
	（半頁）	十圓

二回以上割引あり

御注文は總て前金で願ひます。御送金は振替にて拂込み下さい郵劵代用の際は一割增の事（一錢又は三錢にて）誌代の領收書は別に差上げません、雜誌發送を以つてこれにかへます。

大正十四年三月十三日印刷納本　第三卷
大正十四年三月十五日發行　第二號

編輯發行人　東京市外巣鴨町一〇一九　奥むめお
印刷人

印刷所　東京市小石川區北富坂廿四五　啓新社印刷所

發行所　東京市外巣鴨町一〇一九　「婦人と勞働」職業婦人社
振替東京六四一六〇

大正十二年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十四年三月十二日印刷納本
大正十四年三月十五日發行

婦人と勞働

第三卷第二號

【定價金二十錢】

